

2. 京都第二商業学校山岳部 ー山へのあこがれー

1937(昭和12)年、家業を継ぐために商業学校に進学すると、生涯の山の恩師となる森本次男に出会い、山岳部に入ります。京都北山をはじめ、奥美濃、白山麓の石徹白など遠征するなど、次第に山に魅せられていきます。5年生になると、山岳部の部長を務め、卒業時にはその活躍を賞されました。



ここに注目!

「日記」

京都第二商業学校2～4年生の時の日記2冊である。特にスキーや山登りに行った日の記述は詳細で、いかに楽しかったかが伝わる。1940年1月20日の日記には琵琶湖でのスキー船運航があったことが記され興味深い。

「嶺(やまみち)京二商山岳部報告 紀元二千六百一年」

小谷が執筆している3稿を取りあげた。自身の感じたことを素直に表現するスタイルが後の『山なみ帖』『山なみ帖 その後』につながっている。

京都第二商業学校

○1937(昭和12)年 入学

京都市立第二商業学校 (1910~1948年)

中京区下立売通紙屋川西入中保町

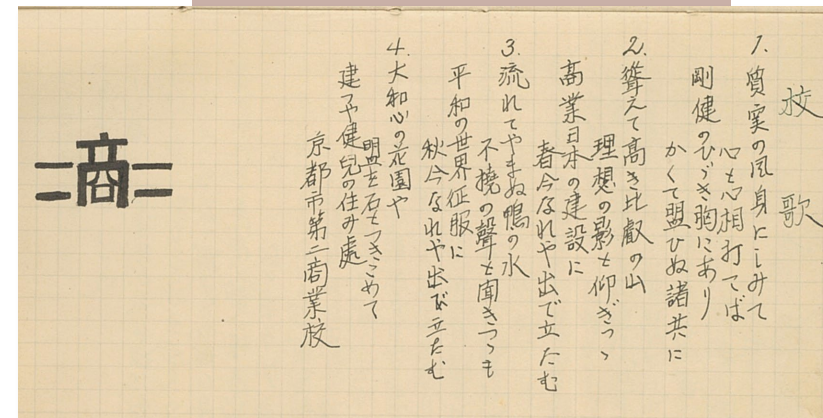
戦後、新制京都市立西陣商業高等学校となるが、
1948年に京都市立西京高等学校に統廃合した。

現在は京都市立北野中学校敷地

敷地内に豊臣秀吉によって造られた京都を囲む土塁
「御土居」が残る。



旗振り教練

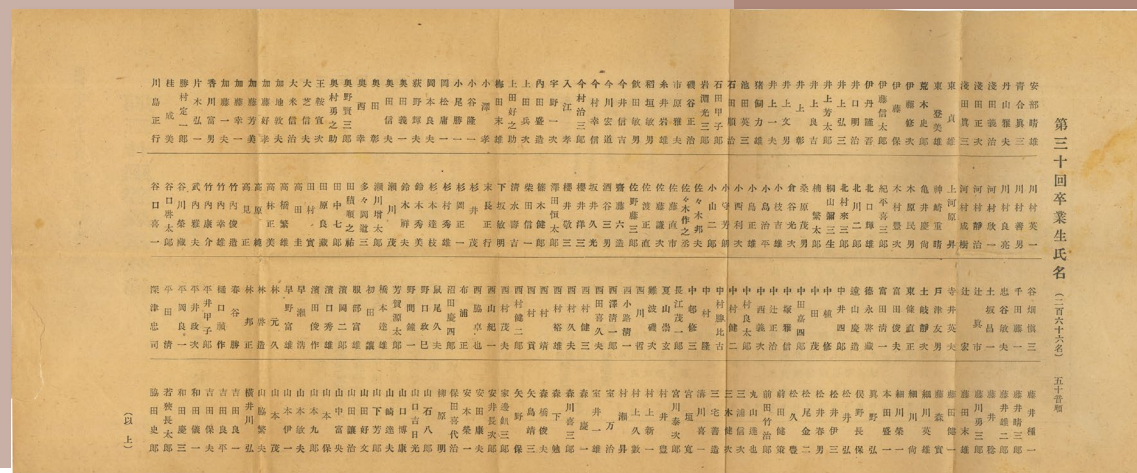


小谷がノート「歌の本」に書いた校歌と校章



学校正門

○1941(昭和16)年 卒業



昭和十六年十二月二十七日
第三十回卒業生名簿

小谷は交同倶楽部奨励賞(山岳)を受ける

写真(小谷隆一アルバムより)・資料 小谷達雄氏 蔵

展示資料No. 3

日記

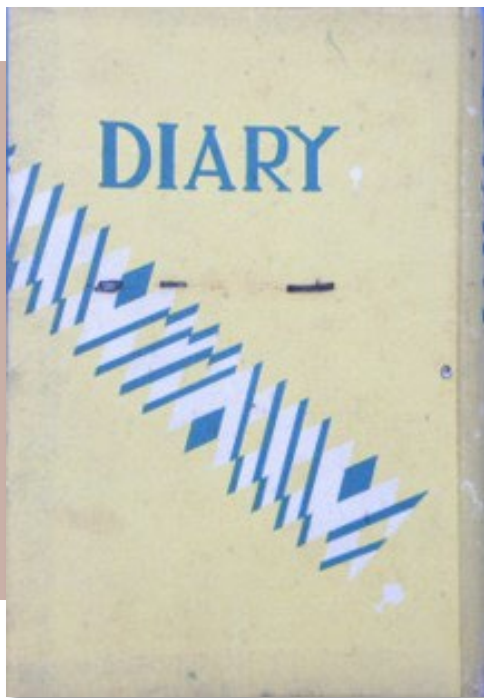
『学生ダイアリー』

昭和14年

博文館発行

小谷達雄氏 蔵

第二商業学校2～3年生の1939年1月1日から
12月22日までの日記、旅行記録、金銭出納録を
収める。



思ひ出

日記に記された野沢温泉・妙高・赤倉へのスキー行をまとめた作文

一月三日 六時頃目が覚めた。外は少し雪が降って居た。先そく風呂に飛込んだ。外に上がれば御飯の用意が出来て居た。我等は腹いっぱい御飯をつめこんでスキーに行く用意をした。八時頃我々一行はこの野沢の最高峯毛無山を征服すべく酒屋の門を出た。未だ小雪が降って居る。吹雪にならいかと心配しつつ、多くの人と日影・ユートピアの両スキー場を越してシュナイダーの麓まで来た。上を見上げれば雪を真白にいただいた木一本もはえてない見事なスロープが高くそびえて居る。何所が頂上で何れが雲であるか見分けがつかない。一步步とシールのはってあるスキーをふみつけ登り出した。きつい坂である。下を見降ろせばぞっとする。よくこのやうな坂をシュナイダーはおりたものだ。途中の一本杉で休み、かんばの小屋で昼食をたべた。もう雪はやんではるかかなたの日本アルプスがよく見える。北のほうの空は晴れて来た。我等は元気一杯張り切って登り出した。

展示資料No. 4

日記

『當用日記（普及版）』

近畿版

昭和15年

博文館発行

小谷達雄氏 蔵

第二商業学校3～4年生の1940年1月1日から
11月1日までの日記、金銭出納録を収める。



一月二十日

学校で山岳部の人と明日花脊へ行かうかマキノにしようかまよったが、結局今晚からマキノに行くことにした。七時半に三条京阪に集ったが同勢は五年七人、三年は宮川、西村、西村であった。大津へは八時すぎについたので十時までそこらをうろついてゐた。スキー船は緑丸にのった。（十時半）早く入ったのでよい場がとれた。船は港を出た所で少し休んで十二時に出帆した。中はやかましかったが、二時間程ねられた。

一月二十一日

目を覚ませがちようど三時であった。船の中で朝食をたべ、少し休んで四時すぎ下船。昨夜から吹雪であったのでバスが通らなく口マキノまで歩いた。スキー場に着いたのはもう日が出て八時頃であった。第三日曜日なので多くの人出であった。途中で五年制とはぐれたので三年生だけですべった。スキー場の雪は一米以上でよい雪であったが、次第にわるくなりパンパンになった。

（後略）

展示資料No. 5

やまみち
『嶺』
京二商山岳部報告
紀元二千六百一年』
1941(昭和16)年
(小谷コレクション)



生涯の恩師 森本次男先生と出会い、3年生より山岳部に入部する。



京都二商時代。前列中央、ロープを肩にする森本先生、その左後ろに座っているのが著者

『山なみ帖 その後』より

山岳部について

小
谷
隆
一

此の間、塚田さんからもらった“北山第二号”を見てみると次の様な事が山小屋倶楽部の山田奈良雄氏の文の一節に書いてあった。

「すっかり森本先生の人柄に打たれてしまった。」

私の母校にもこんなにいい山岳部長がおったなら・・・と羨ましかった。」

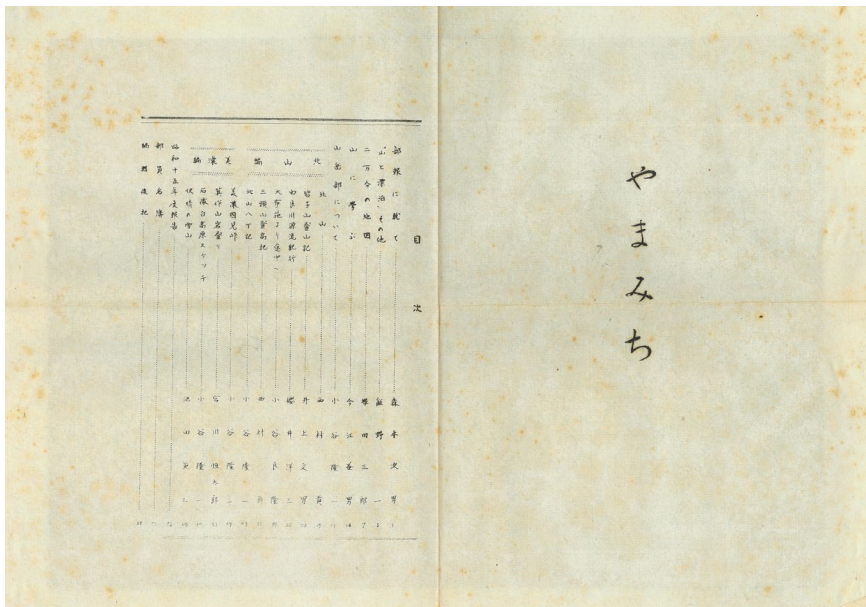
(中略)

森本先生のやうな人を部長に持つ二商山岳部の人達を幸福に思つた。とかく馴れゝば、どんな幸福をも幸福と思はないのが人情であらう。

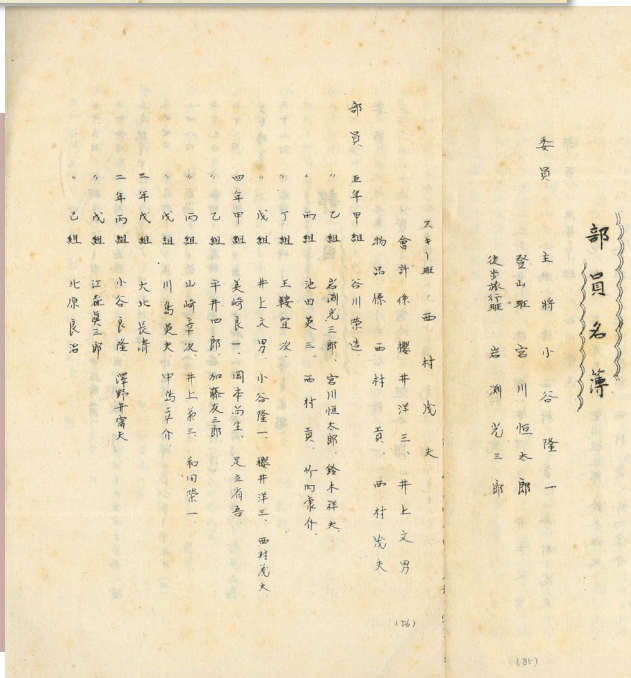
二商の人達は、或は自分自身もそんなに幸福だとは思つてゐないかも知れないが、他所から見て、こんなにいゝ山岳部長は二人とはないものと思える。実に羨しい。云々」と。

僕は此の文を読んで今更ながら我が二商山岳部が森本先生を部長としてゐる幸福を考えた。我らは実に幸福である。

（後略）



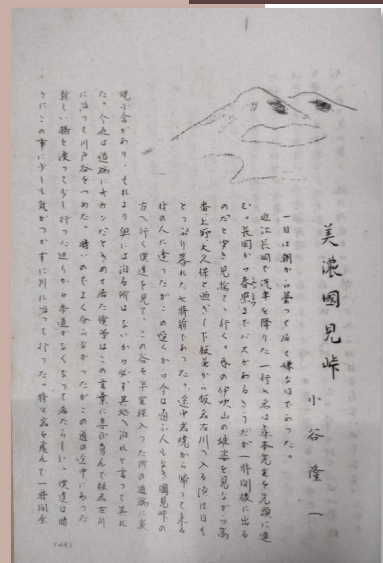
やまみち 目次



部員名簿

山岳部主將 五年年戌組 小谷隆一 (17歳)





奥美濃への山行



森本次男先生

『嶺（やまみち） 京二商山岳部報告 紀元二千六百一年』より

美濃国見峠

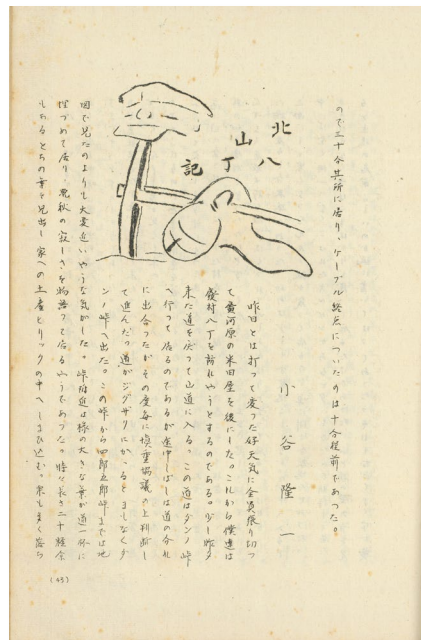
小谷隆一

一日は朝から曇って居て嫌な日であった。

近江長岡で記者を降りた一行七名は森本先生を先頭に進む。長岡から春照までバスがあるさうだが一時間後に出るのだと聞き見捨てて行く。昏の伊吹山の雄姿を見ながら高番、上野、大久保を過ぎて下板並から板名古川に入る頃は日もとっぷり暮れた七時前であった。途中岩焼から帰って来る村の人に逢ったがこの遅くから今は通う人もなき國見峠の方へ行く僕達を見て、この谷を半里程入った所の道端に炭焼小舎があり、それより奥には泊まる所はないから、必ず其処へ泊まれと言つて呉れた。今夜は道端でオカンだときめて居た僕等はこの言葉に喜び勇んで板名古川に沿つて川戸谷をつめた。

（後略）

※オカン 着の身着のままで野宿すること。



「ネガフィルムアルバム」より
小谷達雄氏 蔵

『嶺（やまみち） 京二商山岳部報告 紀元二千六百一年』より

北山八丁記

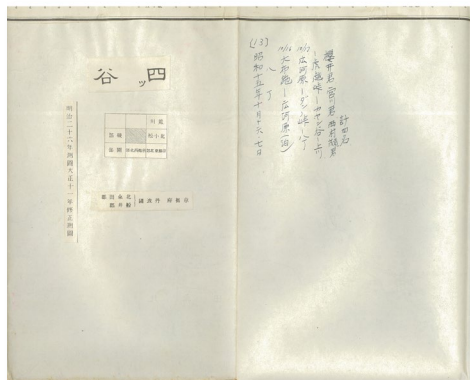
小谷隆一

昨日とは打って変わった好天氣に全員張り切つて廣河原の米田屋を後にした。これから僕達は廃村八丁を訪れようとするのである。少し昨夕来た道に戻つて山道に入る。この道はダンノ峠へ行つて居るのであるが途中しばしば道の分れに出会つたがその度毎に慎重協議の上判断して進んだ。径がジグザグにかゝるとまもなくダンノ峠へ出た。この峠から四郎五郎峠までは地図で見たのよりも大変近いやうな気がした。峠付近は橡の大きな葉が道一杯に埋づめて居り、晩秋の寂しさを物語つて居るやうであった。時々長さ二十糎ほどもあるとちの葉を見出して家への土産とリックの中へしまひ込む。

（後略）

国土地理院 五万分の一地形図 「四ッ谷」

(小谷コレクション)

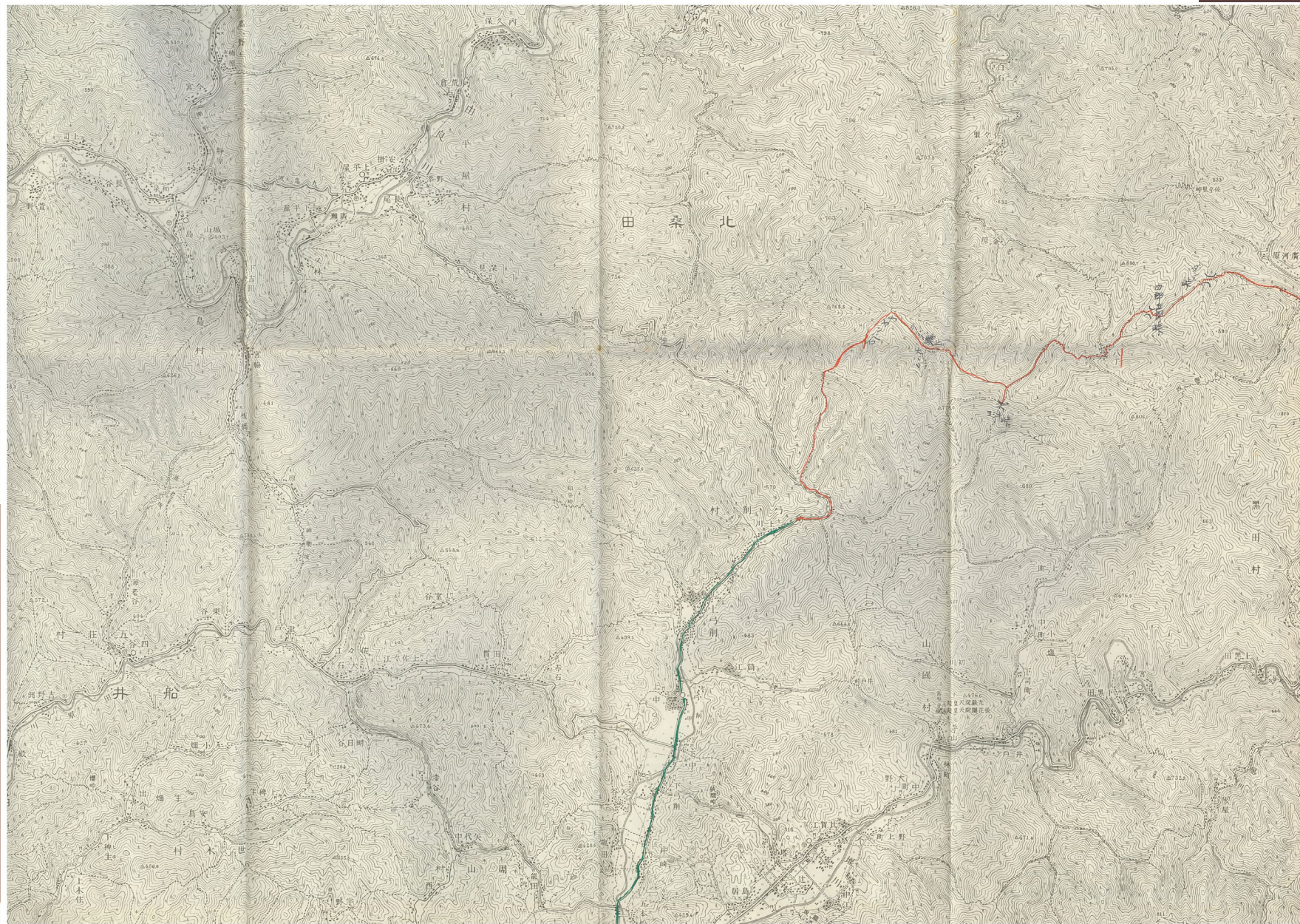


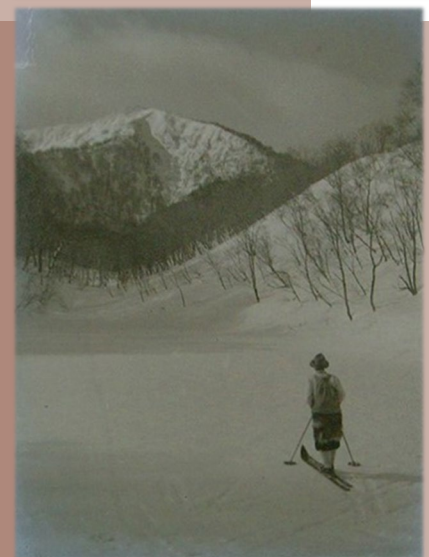
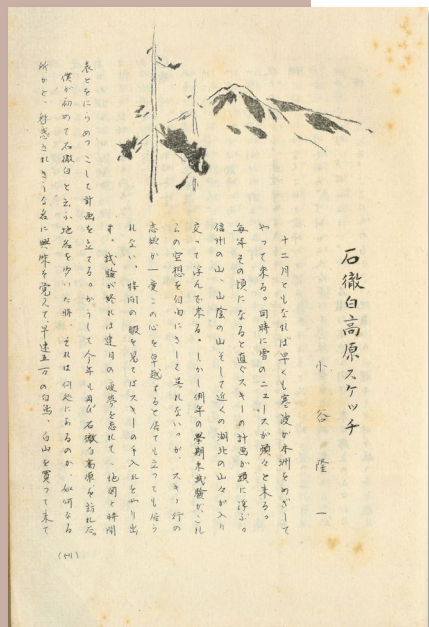
北山八丁記の山行
昭和15年10月16日～17日
小谷 他3名

地図は小谷が使いやすい様に切り貼りしている。

地図にはダンノ峠、四郎五郎峠、コシキ峠、大ババ(大馬場滝)、鱒止り、小ババ(小馬場滝)、カヤン谷の記入がある。

八丁は由良川支流の八丁川源流にかつてあった集落で1941(昭和16)年に最後の家族が離村して廃村となる。





「ネガフィルムアルバム」より
小谷達雄氏 蔵

『燈(やまみち) 京二商山岳部報告 紀元二千六百一年』より

いとしろ

石徹白高原スケッチ

小 谷 隆 一

十二月ともなれば早くも寒波が本州をめざしてやって来る。同時に雪のニュースが頻々と来る。毎年その頃になると直ぐスキーの計画が頭に浮かぶ。信州の山、山陰の山そして近くの湖北の山々が入り交って浮かんて来る。しかし、例年の学期末試験がこれらの空想を自由にさして呉れない。が、スキー行の志欲が一度この心を卓越すると居ても立っても居られない。時間の暇を見てはスキーの手入れをやり出す。試験が終れば連日の疲労を忘れて、地図と時間表をにらめっこして計画を立てる。かうして今年も再び石徹白高原を訪れた。

(後略)

『山なみ帖 その後』より

いとしろ

「石徹白懐古」

(前略)

ひと汗かいて登りつめた峠はすっかり雪におおわれていた。巨大なブナの大木がそびえ立っており、その根元には小さな木製の祠がつくられていた。標高九六〇メートルの峠に立つて初めて石徹白高原の方向を望んだときの感激は忘れることができない。

白一色の景色である。なだらかな丘陵が遙かにつらなり、白山の連峰に達しているが、ところどころまじっている森の黒ずんだ色以外は白色しか眺められない。数時間前まで私が立っていた都会の世界とはまったく異なった景観である。景色だけではない。吸い込む空気の香りと味が都会とはちがっている。私は思わず両手を高く上げて新鮮な山の空気を胸いっぱい吸い込んだ。

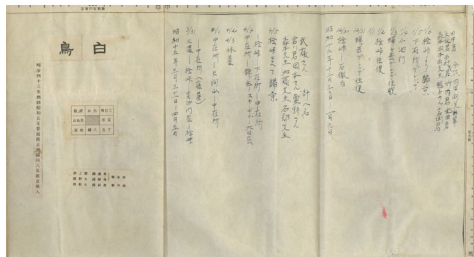
檜峠。それは異なったふたつの世界のつなぎの場である。木の祠の中のお地蔵さんも、これから先は厳しい雪国だよと、笑顔で警告をしてくれているように見える。静かな山国の、峠らしい峠であった。峠から石徹白の村落まではゆるやかな下り道が約五キロつづく。ストックでスキーを押しながら滑るといった歩みで、一時間余りで村に着いた。

(後略)

「石徹白高原スケッチ」をモチーフとした作品
『山なみ帖 その後』『石徹白懐古』

国土地理院 五万分の一地形図 「白鳥」

(小谷コレクション)



石徹白高原への山行

昭和15年3月31日～4月5日

昭和16年12月30日～1月6日

昭和17年3月25日～3月30日
にも再訪している。

地図には根後谷、蟬ヶ岳、
鎌ヶ峰、宿の平、ブドウ原な
どの記入がある。

『嶺』には石徹白への山
行の詳細が記され、谷屋旅
館の宿泊領収書が残って
いる。



山岳部部长

もりもと つぐお
森本 次男

- 1899年2月8日 群馬県前橋市 猪谷家に生まれる。
(スキーの猪谷六合雄氏は従弟)
- 1922年3月 京都高等工芸学校(現 京都工芸繊維大学)
染色科卒業
- 1923年2月 森本家(男山八幡宮宮司)に入籍
- 1923年4月 京都府立第二商業学校教諭
(物理・化学を教える)
- 1928年6月 京都山岳会会長
- 1935年9月 山小屋「麗杉荘」建設
- 1940年12月 京都登山聯盟会長
- 1947年 京都山岳協会会長
- 1948年 京都府山岳連盟副委員長
- 1962年3月 西京高校退職
- 1965年11月26日 逝去(66歳)
- 1966年11月27日 レリーフ建立除幕式
(写真(下):小谷隆一あいさつ レリーフ前向かって右側)

主な著書

- 『京都北山と丹波高原』
- 『樹林の山旅』
- 『山の言葉』
- 『山・旅・人』
- 『比良連峰』
- 『木曾路の旅』
- 『新版 京都北山と丹波高原』

朝史門として

- (アーサー・シモンズ(1865-1945)のもじり)
- 『山と漂泊』
- 『山の風景』
- 他多数の著作



※『京都北山から』京都府山岳連盟
掲載写真

※『復刻 樹林の山旅』の付録38・54頁に、朝史門はアーサー・シモンズのもじりであることが明確に述べられている。昭和4年ごろから使用という。